



# 五輪への 思いと願い

Special Interview

## 宇津木妙子 先導役の務めと責務

9月8日早朝、日本中が歓喜に包まれた「2020年東京オリンピック・パラリンピック」の招致決定。しかしその翌日、同じアルゼンチンの首都ブエノスアイレスからソフトボール界にとっては、“悲報”が届いた。そこで今号では、国内外で活発な五輪復帰・普及活動に尽力する宇津木妙子氏の今回の除外や五輪への思いに迫った。

取材・構成●本誌編集部 写真●JMPA、フォートキシモト、AP、BBM

無念、3度目の除外通告

——宇津木さんは野球・ソフトボールの五輪復帰活動とともに、2020年の東京招致活動にも尽力されてきましたね。

宇津木 本当に良かった。まずは、これに尽きると思います。表には見えないところで大勢の方々がそれぞれの立場で「日本で、東京でオリンピックとパラリンピックを開催したい」と必死に訴えてきた賜物です。一方で「国内がまだ大変なときに、なんでオリンピックなんだ」という声があるのは確か。でも、東京でオリンピックをやることで何かが変わる。いえ、変わらなければいけません。それにはこのオリンピックがきっかけになるんです。

——具体的にその「変化」を必要とするものは何でしょうか。

宇津木 例えは、

指導者の指導方法やアスリートの

の競技に対する

考え方もそう。

根性論主体で

やっていただけ

でも、結果が出

る、出ないでそ

れはガラリと変

えざるを得ませ

ん。また、特に

チームスポーツ

は超一流の物の

考え方を持った選手、スタッフ

が集約したチームにならないと

世界一にだって到底なれるもの

でもありません。この東京開催

で多くのことが変わっていくも

のと思えますね。



▲9月9日、野球・ソフトボールのプレゼンテーションを見るIOC委員。「最高だった」（宇津木氏）という内容も、当確のランプはつかなかった（写真/AP）

今年4月に世界野球ソフトボール連盟という組織が立ち上がり、ともに五輪復帰を願い、活動してきた集大成となったわけですね。

宇津木 野球とソフトボールはともにダイヤモンドスポーツではあります、厳密には違う競技ですから、一緒になって活動するなんて普通だったらなかったことでしょう。互いに積み上げてきた文化、伝統がある中で両方とも男女がありますから、それにもかかわらず垣根を越えて、今回あの場に両方の競技が一つになって世界に発信したんです。すごいことですよ。

しかし、国際オリンピック委員会（IOC）総会による投票結果は、レスリングが49票、野球・ソフトボールが24票、スカッシュが22票。大差をつけられて、2020年の五輪復帰とはいきませんでした。

宇津木 私はプレゼンテーションの会場とは別の場所でもニター越しにそれを見ていて、「これはいける」と手ごたえを感じていました。でも、言われたように大差をつけられての2位でした。うがった見方もしれませんが、そもそも第1回大会から競技種目に入っていたレスリングが外れたのは、ほかの競技に對しても「こういうことがありえるんだよ」というIOCのメッセージがあったのかなど。

それでレスリングのお尻をたたき、そのタイミングでたまたま野球・ソフトボールとスカッシュがかち合ってしまった。

宇津木さんの心の中は……。宇津木 「私たちは一体なんなんだ」と。あの場にいたことで、余計にみじめに思いましたね。でも、今思うと、あそこいられてよかった。やっぱり悔しいじゃないですか。それがエネルギーになるんです。それでも帰りの飛行機の中では一睡もできませんでした。2005年、09年に続いて三度の除外を通告されて、普通の人なら諦めるんだらうなど。たしかに私の中に諦めようとする自分がいました。でも、できるうちにはまだやらないといけない。そういう葛藤を30時間も飛行機の中で抱えながら帰国しました。

### 諦めからのリカバリ

今おっしゃったオリンピックからの最初の除外、12年のロンドン大会からの競技除外が決定した05年。宇津木さんは前年のアテネ大会で監督だったのですが、その悔しさも特別だったのではないのでしょうか。

宇津木 悔し涙、流しましたよ。でも、泣いてばかりはいられませんから、復帰に向けてそのあとにやるべきことはやはり、ヨーロッパやアフリカでの普及

活動に力を入れなくてはならないと考えました。イギリスやアフリカの各地にも足を運びましたよ。でも、残念ながら結果的には実ることはありませんでした。どこか楽観視しているというか、この事態をソフトボール界全体として重要視する雰囲気になり切れていなかったように思います。

そして、16年のリオデジャネイロ大会への復帰も立ち消えたのが、09年でした。

宇津木 その報せを聞いたのは、アフリカのセネガルにいたときに（宇津木）麗華から電話があったんです。「落ちたよ」と。その直後にガンビアに移動したんですが、そのショックが大きくて……。「なんで自分がこまでやらなくてはいけないのかな」と思いましたね。

しかし、宇津木さんは今回もソフトボール界の顔として活動の先頭に立たれていました。2度目の除外でも諦めることはなかったんですよ。

宇津木 実はこんなことがあったんです。ガンビアから帰国してすぐに講演で福島に行って、そこで中学校2年生のある女の子から「私には夢があります。ソフトボール選手としてオリンピックに出たいんです。だからかなえてください」と。子どもって純粋ですよ。ソフトボールがオリンピックから除外された

ニュースを見てもまだできると信じている。これを聞いて、私はまだまだ頑張らないといけないなど決意しました。だからそのあとも国内、国外に問わず、あちらこちらに飛んで普及活動に力を注いできたんです。

「諦めない」。何度も打ちのめされると、なかなか難しいことですが……。

**宇津木** 確かにそう。アルゼンチンから帰国してから招致活動で一緒に来た方々に今回のことで皆さんにお礼状を書いたんです。それである方からお返事をいただいたんですが、その中に、「夢は諦めたら終わりだ。夢はかなうから夢なんだ。宇津木さんだって今までそうやってきたでしょう。私たちも一度東京が落選したときは、諦めかけた。でも、夢はかなうから頑張ろうとやってきたんです」と。このお手紙を見て、「よし、やるう」と勇気づけられましたね。

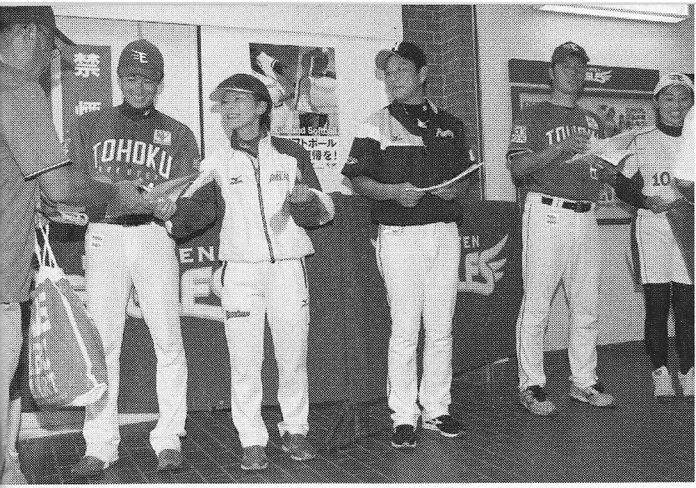
### 次世代のためにも

——やはりオリンピックというのは、宇津木さんのようにこれほどまでに情熱的なエネルギーを生み出してくれるステージなのではないですか。

**宇津木** ええ、「最高」「最強」の舞台ですよ。アトランタ大会で初めてコーチとして、それからシドニー、アテネで監督として行かせてもらいましたが、本

「二握りの人間しか立てないあの場所で感じるものは、計り知れない」





▲8月にKスタ宮城でプロ野球界の協力を得て行われた、五輪復帰活動の風景



▲メダリストたちを中心に、彼女たちがソフトボール界の先導役にならなければいけない

当にそう思います。一握りの人間しか立てないあの場所を感じるのは、計り知れませんが。それだけに、子どもたちにあの場所ですプレーすることに挑戦してほしいし、私も手助けしたい。国体が各都道府県の名譽をかけて郷土のために戦う場所なら、オリンピックは日の丸を背負って立つ。ナショナルリズムを感じさせられますよね。これは非常に重いもので、背負った者には分かりませんが、アスリートなら経験すべきことでしょう。

——通常の精神状態ではない。そんな状況下でのプレーやゲームになるんでしょうね。

**宇津木** オリンピックでは、普通が普通ではなくなります。麗華はシドニーでの決勝戦（対アメリカ）で、リサ・フェルナンデスのチェンジアップをホームランにしました。実は彼女、それまで一度もリサのそのボールに手を出したことがなかった。何度も戦っていましたが、打つのはストレートだけで、チェンジアップを打つのはオリンピックと照準を絞っていたんです。それを現実に実行する能力を4年間という準備期間で磨き上げる。ソフトボールに限らず、オリンピックにかける選手たちの姿はカッコいいですよ。

——北京大会での上野由岐子投手にも同じようなエピソードがあったと聞いています。

**宇津木** アテネ大会が終わってから麗華と一緒に彼女はアメリカに渡って、シニールボールをマスターしてきた。でも、それを初めて実戦で使ったのは、3年後の北京決勝のアメリカ戦で、それまで封印していたわけです。アテネからの4年間、上野は私

みたいなうるさいおばさんをはじめ、周りからいろいろ言われ、もがき苦しんできたでしょう。そういう中でプレッシャーを跳ね返して、あのピッチングにつながったんです。

——そういう選手やプレー、やはり東京開催だからこそ多くのファンが望んでいたはずですか。

**宇津木** 6月に前橋、8月に仙台で開催されたプロ野球の試合にお邪魔して、野球ソフトボールの復帰活動をさせていただきました。その後、フェイスブックページへの反応が各段に上がり、やはり野球の力が大きいことを再確認しました。最初は小さな活動でしたが、徐々に皆さんにその輪が広がっていったのを実感しましたね。

——組織として野球とタッグを組んだ以上、これからも宇津木

さんの中ではとても活発な活動を続けていくのでしょうか。

**宇津木** レスリングに比べれば、動き出しが遅かったことは明白だし、今回の除外で組織としてやるべきことがいろいろ分かってきたことでしょう。プロ野球の選手たちが言うには、「WB Cとオリンピックは違う。何がなんでもオリンピックは出たい」と思える大会です」と。だから、「ぜひ呼んでください」と言ってくれている新井良太選手（阪神）、高橋由伸選手（巨人）たちに無理のない範囲で協力してもらって、オフに各地でクリニックをこれからもやっていきたい。これは変わらないことですね。

——NPO法人ソフトボール・ドリームを立ち上げ、まさにソフトボール界の顔となってそうした普及や五輪への復帰活動をされていますね。

**宇津木** 運営は大変ですが、何もかもがソフトボールへの恩返し。これに尽きます。復興支援

とともに社会貢献するのは当然のことです。出会った子どもたちには社会の厳しさもソフトボールを通して教えているつもりです。すべてがソフトボールを通して学ぶ。自分にも言い聞かせて、やれるだけのことは私にはやるつもりでいます。

——あとは第二の宇津木妙子が出てくれば、心強いですね。

**宇津木** いつまでも私が先頭に立つてやるものではないでしょうね。どこかのタイミングで先導役をバトンタッチしないと、私ができる、できないではなく、将来を考えればメダリストの選手たちが先頭に立っていないといけない。そういうことをそろそろ伝えていくのも私の務めかなとも考えています。さみしい部分もありますが、いつかはそういうときが来る。そのために私は彼女たちにいい道をつくっておかないといけない。若い世代の考えがこれからのソフトボール界をまとめ、変えていく時代なんです。



うつぎ・たえこ／1953年4月6日生まれ。埼玉県出身。星野女子高（現星野高）卒業後、ユニチカ垂井（岐阜）で14年間プレー。86年から日立高崎（現ルネサスエレクトロニクス高崎）で監督を務め、日本女子1部リーグ、全日本総合選手権を各4度優勝。日本代表監督として2000年シドニー五輪銀メダル、04年アテネ五輪銅メダルを獲得した。現在は日本ソフトボール協会常務理事・国際委員長。2011年、NPO法人ソフトボール・ドリームを設立。世界を視野に入れたソフトボール普及に力を入れている。